2026 年 11 月 19 日

報道関係各位

一般社団法人電子情報技術産業協会

INTER BEE AWARD 2026 決定



一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA：代表理事/会長 新野 隆 日本電気株式会社 取締役 会長）は、現在開催中のメディア総合イベント「Inter BEE 2026（インタービー 2026）」において展示されている技術・製品・サービス・ソフトウェア・コンテンツ等を対象として、優れた展示案件を表彰する「INTER BEE AWARD 2026」の各部門賞（「プロオーディオ部門賞」「コンテンツ制作／放送・メディア（ハードウェア）部門賞」「コンテンツ制作／放送・メディア（ソフトウェア／ソリューション）部門賞」「エンターテインメント／ライティング／映像表現部門賞」の 4 部門）、「審査委員会賞」および本年より新設した「IBEF（Inter BEE Expectation for the Future）賞」がそれぞれ決定したことを発表しました。

INTER BEE AWARD は、本年が 3 回目となります。Inter BEE が対象とするメディア&エンターテインメント分野の活性化と将来に向けた進展、同分野における技術進歩や多様な創造活動の発展に寄与することを目的としています。最新の技術動向を踏まえ、同分野の有識者で構成された INTER BEE AWARD 2026 審査委員会の厳正な審査により選出されました。詳細は特設ページをご参照ください。

INTER BEE AWARD ページ： https://www.inter-bee.com/ja/forvisitors/award/

＜INTER BEE AWARD 2026 受賞一覧＞

プロオーディオ部門賞

◆グランプリ
案件名：世界初のガラスキーにより、音づくりのオペレーションを革新するデジタルミキシングコンソール「DM5 シリーズ」
出展者名：株式会社ヤマハミュージックジャパン

【案件概要】
DM5 シリーズは、ライブ SR、劇場、放送、設備音響、配信など幅広い用途に対応するデジタルミキシングコンソールです。DM7 シリーズで培った高音質、高い拡張性、直感的なワークフローをコンパクトな筐体に凝縮。世界初のガラスキーを採用した新しいユーザーインターフェースと、用途に応じて拡張できるシステム設計により、迅速で確実なオペレーションを実現します。

【選評】
デジタルミキシングコンソール「DM5 シリーズ」は、ライブ音響や放送、配信などに対応し、操作部に独自の「ガラスキー」を採用した。ガラス面の凹凸と入力判定のしきい値によって物理キーに近い押下感を持たせつつ、状況に応じてキーの表示や機能を変更できる。操作の確実性とソフトウェアの柔軟性を両立した点が特徴だ。

演者や舞台を見ながら指先で操作できることは、迅速な判断が求められる現場で利点となる。機械式ボタンの削減は部品点数や故障要因の抑制にもつながり、ガラスパネルのコストを含めても製品全体でコスト削減ができると説明する。ピアノの打鍵試験で培った知見を耐久性検証に生かした点も特筆され、操作体系を刷新する技術と実用性が高く評価されてグランプリに選ばれた。

◆準グランプリ
案件名：オーディオシェイク
出展者名：Studio-J Consulting 株式会社

【案件概要】
クラウドベースの AI 音声分離処理サービス。
収録音声のノイズ除去、アーカイブ素材の音楽差し替え、台詞差し替えや、楽曲の楽器分離、複数話者素材の話者分離など、今まで困難と思われていた音声の分離を AI 技術によって実現したサービスです。

【選評】
AI 音源分離サービス「AudioShake」は、完成済みの映像・音楽素材から、台詞や音楽、楽器などの音声成分を用途に応じて取り出す技術。複数の音が混ざった状態から必要な成分を分離でき、元のマルチトラック素材が残っていなくても、台詞の差し替えや楽曲の再編集などに活用できる。

過去の番組やスポーツ映像では、会場で流れた音楽などが再利用の障壁になることがあるが、必要な音だけを分離できれば、権利確認を前提にアーカイブの再編集・二次利用の幅が広がる。会話音声を低遅延で分離する「Dialogue RT」も展開し、ポストプロダクションに加えて生放送やライブ音響への応用が期待される。制作工程の制約を減らす実用性と発展性が評価された。

コンテンツ制作 / 放送・メディア（ハードウェア）部門賞

◆グランプリ
案件名：Swoop ロボティクスクレーン
出展者名：株式会社昭特製作所

【案件概要】
従来、熟練カメラマンの手動操作に依存していたクレーンカメラを Robotics 化。TR-XT 制御システムに統合し、事前に登録したカメラワークの再現と精密な遠隔制御を実現する。 ペデスタルカメラとの統合運用により、映像品質を維持しながら、番組制作現場の省人化と新たな映像表現を可能にする。

【選評】
プロ向け特機機材で知られる昭特製作所のロボティクスクレーン「Swoop」は、同社のカメラ制御システム「TR-XT」と連携し、クレーンをほかのロボットカメラと一体で運用できる。撮影位置や動作の登録・再生に対応し、仮想的な走行経路を設定する「SoftRail」、障害物の検知や三次元の動作範囲設定など、安全な自動運用を支える機能も備えている。

ブースのデモでは、TR-XT による複数カメラの一元操作や、登録したショットをクレーンで再現する動きを確認できる。必要に応じて手動操作にも切り替えられ、撮影者の意図に応じた演出を維持しながら、少人数でも安定したカメラワークを組み立てられるなど、単なる省人化を超えたクレーン特有の立体的な映像表現を、再現性と安全性を備えたスタジオ運用へ取り込んだ点が高く評価された。

◆準グランプリ
案件名：高精度ハンディ空間キャプチャシステム「Lixel L3」による、ロケハン・美術セットの 3D デジタルツイン化と映像制作ソリューション
出展者名：株式会社神戸清光

【案件概要】
XGRIDS Lixel L3（エックスグリッズ リクセル エルスリー）は、5mm の検証済み相対精度を持つ高精度 LiDAR、4K HDR トゥルーカラービジョン、RTK、SLAM を一体化したハンディ型空間スキャナーです。1 回の歩行計測から高精度カラー点群、テクスチャ付き Mesh、フォトリアルな 3DGS を生成。映画・VFX・バーチャルプロダクション、デジタルツイン等で、実空間を映像・3D 資産へ変換します。

【選評】
神戸清光が出展した「Lixel L3」は、歩きながら空間を記録できるモバイル 3D スキャナー。LiDAR の点群計測と 3 基のカメラによる画像取得を組み合わせ、寸法・形状を扱うデータと、3D Gaussian Splatting（3DGS）による写実的な空間表現の双方を生成する。同じ技術を使う「PortalCam」と異なり、計測用の点群データも取り出せる。

空間を歩いて取得したデータから、寸法や形状を扱える点群と実景の質感を再現した 3DGS モデルを確認できる。定点での計測を繰り返す負担を抑えながら、実寸に基づく空間把握と視覚的な再現を同じ取得工程で行えることは、ロケハンやセット設計、VFX の検討に有用であり、専門的な測量技術を映像制作の身近な道具に変え、空間の記録から表現までをつなぐ可能性が評価された。

コンテンツ制作 / 放送・メディア（ソフトウェア／ソリューション）部門賞

◆グランプリ

案件名：AMPP - メディア革命をリードするソフトウェアプロダクションと配信のためのプラットフォーム

出展者名：グラスバレー株式会社

【案件概要】
AMPP はソフトウェアディファインド・メディアプロダクションプラットフォームで、ライブ制作/アセット管理・編集/プレイアウト向けに数多くのアプリケーションを提供。従来多くのハードウェア機器を組み合わせて構築していたシステムをソフトウェア上で完結し、従量課金またはサブスクリプションモデルで利用できる。また、アライアンスパートナーとの連携により、自社製品以外とのシステムアップも可能となる。

【選評】
グラスバレーの「AMPP」は従来、専用の映像スイッチャーや音声ミキサー、リプレイ装置、送出機器などが担っていた機能を、ソフトウェアのアプリとして提供するグラスバレーのメディア制作プラットフォーム。必要なアプリを選び、接続することで制作システムを構築できる。操作は Web ブラウザーで行えるほか、使い慣れた物理操作パネルもコントローラーとして利用可能。クラウドだけでなく、局内サーバーでの運用にも対応する。

番組の規模や制作期間に応じて機能を組み替えられ、必要なときだけ利用する運用も可能であり、大規模スポーツイベントでは、開催期間に限って 100 を超える多チャンネルの送出を行った実績も有している。単に専用機器をアプリに置き換えるだけでなく、制作から送出までを一つの基盤で扱い、従来の操作感も残しているなど、放送システムの構築と運用を柔軟に変える完成度と実績が高く評価された。

◆準グランプリ
案件名：VMO-AIPlus
出展者名：株式会社テレビ北海道

【案件概要】
◆学習し、予測し、自ら動く。
VMO-AIPlus は、放送局のマスター監視を AI が自動で行う自立型プラットフォームです。映像・音声・アラームをリアルタイムに解析し、障害の検知から初動対応、関係者への連絡までを、人手を介さず一気通貫で完結させます。

・既設設備の改修なし：既存の映像信号・PC 画面をそのまま入力して監視を開始
・検知から対応、連絡までを自動化：AI が判断し、KVM 経由でオペレーターと同じ PC 操作まで実行
・24 時間 365 日ノンストップ：疲労や見落としのない AI が常時監視
・自局開発・実運用：テレビ北海道が開発・運用し、現場のノウハウを反映
・導入実績：2026 年 8 月 1 日より、テレビせとうち・TVQ 九州放送でも運用を開始

基本動作は「見る、聞く、読む、判断する、知らせる・動く」の 5 段階です。

【選評】
放送マスターの監視は、映像・音声の異常だけでなく、複数機器から発せられる警報を読み解き、原因を判断して適切に対処する必要がある。テレビ北海道の「VMO-AIPlus」は、映像や監視画面などの情報を取り込み、異常の検知、原因の絞り込み、PC 操作、報告を連携させる放送運行監視システム。あらかじめ構築したルールと警報の組み合わせを照合し、対応につなげる仕組みを備える。

異常発生から原因の特定、系統切り替えまでの一連の流れを示したデモは、複雑な監視業務をどこまで自動化できるかを具体的に伝えるものだった。AI の判断に全面的に委ねるのではなく、放送局が蓄積した運行手順を活用する点も実務的だ。自局の課題から開発を始め、他局への展開まで進めたことは特筆に値する。多くの放送局が必要性を感じながら実現が難しかった仕組みを、現場で運用できる形にした実装力が評価された。

◆準グランプリ
案件名：コンテンツ理解型 PR 写真選定 AI「ICHICA」
出展者名：東海テレビ放送株式会社

【案件概要】
ICHICA は、台本や企画書の内容を理解し、大量の写真からコンテンツの PR に適した候補と選定理由を提示する写真選定支援 AI です。ピンボケ、露出、目つぶり等の品質判定に加え、出演者、シーン、表情、企画意図との適合性を評価します。AI が最終決定するのではなく、担当者の判断を支援し、選定作業を効率化します。

【選評】
ドラマや番組の広報写真は、画質が良いだけでは選べない。次回の見どころや登場人物の関係など、何を視聴者に伝えるかによって適した一枚は変わる。東海テレビ放送の「ICHICA」は、台本をシーンごとに解析し、「自然な笑顔」「次回の重要な場面」といった条件に合う写真を AI が順位付けする選定支援サービス。候補を選んだ理由を示し、自由文による指示にも対応する。

写真を機械的に分類するのではなく、作品の文脈と広報担当者の意図を選定条件にできる点に特徴がある。最終判断は人が担い、AI は大量の写真から候補を探す作業を支援するといった、局内で培った仕組みを外部向けのサービスにも展開しており、写真選びに費やしていた時間を企画や表現の検討へ振り向けられる。既存の AI 技術を現場固有の仕事に結び付けた着眼点と、他の広報業務やその他の応用への広がりに期待が寄せられた。

エンターテインメント / ライティング / 映像表現部門賞
◆グランプリ
案件名：HumanKeyer ー AI を用いたクロマキーに変わる人物マスクシステム
出展者名：株式会社テレビ朝日/株式会社テレビ朝日クリエイト/株式会社 Qoncept

【案件概要】
AI を用いて人物シルエットを認識し、SDI のキー信号を出力する「ヒューマンキーヤー」を放送用に商品化しました。クロマキーの代わりに使用することで、グリーンバックの使えない場所でも CG を演者の後ろに描画するような画期的な映像制作手法を実現できます。

【選評】
「HumanKeyer」は、AI で人物の輪郭を抽出し、クロマキー用の背景がなくても人物の前後に CG を合成できる放送コンテンツ向けシステム。人物のキー信号を SDI で出力するため、特定の CG ソフトに依存せず、既存のテロップ装置や映像設備と組み合わせて使える。映像とキー信号の遅延調整にも対応する。

通常の CG スーパーでは人物の手前に映像が重なるが、HumanKeyer を使えば演者の背後にも CG を配置できる。専用背景を設けにくい生放送や屋外中継でも、人物を生かした奥行きのある演出が可能だ。人物抽出技術を既存の放送信号系統に組み込み、設備を大きく変えずにリアルタイムの映像表現を広げる実用性が高く評価された。

◆準グランプリ
案件名:色に、揺るがぬ基準を。カラーマネージメント OLED モニター「ColorEdge CG3200X」
出展者名：EIZO 株式会社

【案件概要】
CG3200X は、31.5 型 4K UHD 対応のカラーマネージメント OLED（有機 EL）モニターです。ピーク時 1000cd/m²・全画面白時 300cd/m²の高輝度、150 万:1 の高コントラスト比を実現します。さらに、新規開発した EIZO 独自の表示制御技術によって輝度を最適に制御。信頼性の高い色再現と階調表現を実現し、HDR 映像をはじめ、多様な制作ワークフローにおける正確な映像確認を支援します。

【選評】
EIZO の「ColorEdge CG3200X」は、深い黒や高輝度部分の表現に優れた OLED を採用する映像制作用モニター。OLED では、パネル保護のための自動輝度制限（ABL）が映像によっては必要以上に輝度を下げることがある。本機は入力信号を詳細に解析する独自制御で不要な輝度低下を抑え、制限が働いた際にはインジケーターの色で知らせる。

展示では、一般的な OLED 方式との比較で輝度の安定性を示した。重要なのは、輝度制限を完全になくすのではなく、必要な場合にはその作動を制作者が把握できることだ。映像自体が暗いのか、モニター側の制御によるものかを見分けやすくなり、HDR のグレーディングや品質確認での判断を支える。OLED の画質を生かしつつ、表示を信頼して作業できる環境を追求した点が評価された。

審査委員会賞

案件名：SwiftWing Sirius NDR ネットワーク・ドライブレコーダ/SwiftWing 捕右衛門 ST2110
出展者名：株式会社コムワース

【案件概要】
SwiftWing Sirius NDR ネットワーク・ドライブレコーダ
ST 2110 の放送 IP ネットワークを無損失で常時記録し、映像・音声・ANC をストリーム単位で解析して、記録した信号をそのまま再送出できるネットワーク・ドライブレコーダ。RTP シーケンス番号によるパケットロス・順序入替を検知し、ST 2022-7 のヒットレスマージを装置内で再現して 1 本の PCAP として抽出できる。10M～100Gbps、最大 8ch、容量 2TB～26PB。

SwiftWing 捕右衛門 ST2110
放送 IP ネットワークに影響を与えず、ST 2110 および ST 2022-7 のトラフィックを常時解析するリアルタイムモニタ。10GbE×2 ポートで映像・音声・ANC・PTP をストリーム単位に監視し、IPG ジッタ、RTP パケットロスやシーケンス異常、ヒットレス冗長の Class A～D 閾値超過を自動検出する。異常検知箇所から Sirius NDR へワンクリックで遷移し、その瞬間の信号を再生・可視化できる。

【選評】
放送設備の IP 化が進むなか、映像の異常を調べるには、画面の状態だけでなくネットワークを流れるパケットの監視も欠かせない。コムワースの「SwiftWing 捕右衛門 ST2110」は、ST 2110 伝送のパケットロスや順序の乱れ、遅延などを監視するアプリケーション。パケットを記録・再生する「SwiftWing Sirius NDR」と連携し、異常発生時の状態を後から検証できる。

冗長化された A 系・B 系それぞれの障害を追い、最終的な放送映像への影響まで確認できる点も実用的だ。これまで現場の利用者には難しかったパケットキャプチャを活用した原因の切り分けを支援し、機器とネットワークのどこに問題があったかを確かめられる。AI や自動化が進む時代だからこそ、判断の根拠となるデータを残し、技術者自身が検証できる環境を提供する意義が評価され、連携する 2 件の応募を合わせて審査委員会賞とした。

IBEF（Inter BEE Expectation for the Future）賞

案件名：SynapseRack－AI と対話しながら組める、ライブエンタメのためのリアルタイム映像演出ソフトウェア
出展者名：株式会社 SynapseRack

【案件概要】
SynapseRack は、ノードをつないで映像演出を組み、本番は音楽に合わせて人が操作する、ライブエンタメのためのリアルタイム映像演出ソフトウェア。内蔵 MCP サーバーにより、Claude Code 等の AI と対話しながらノードを組むこともできる。リアルタイム処理のため書き出しを待たずにその場で直せ、低価格なライセンスと合わせて、演出の試行錯誤を安く何度も回せる。

【選評】
ライブ映像の入力、加工、合成、出力などの機能を組み合わせ、リアルタイムに映像演出を構築できるソフトウェア「SynapseRack」。公演内容や会場に合わせて演出を柔軟に変更できるほか、AI 開発ツールとの連携にも対応。自然言語による指示からノードの作成や接続を支援し、映像演出の制作工程そのものを効率化できる。

AI が生成した結果をそのまま使うのではなく、検証された機能を制作者自身が確認・調整しながら組み合わせられる点が特徴であり、無料版を用意するなど、高価な機材や専門知識が障壁となっていたライブ映像制作への入口も広げている。AI を新たな制作支援の手段として導入し、若いクリエイターの参入や映像表現の可能性を広げる取り組みとして、今後の発展に大きな期待が寄せられた。

＜INTER BEE AWARD 2026 について＞

Inter BEE 2026 に展示される技術・製品・サービス・ソフトウェア・コンテンツ等の中から、出展者が事前に応募した出展品を応募案件として「INTER BEE AWARD 2026 審査委員会」が「先進性・独創性」「技術性」「市場性・経済性」「課題の解決性」「魅力度、その他」の観点から優れていると高く評価できるものを審査・選考し、表彰するものです。

【 Inter BEE 2026 公式 Web サイト： https://www.inter-bee.com/ 】

名　　称 ： Inter BEE 2026（インタービー 2026）
会　　期 ： 2026 年 11 月 18 日(水) ～ 11 月 20 日(金)
時　　間 ： 18 日(水)・19 日(木) 10:00～17:30 ／ 20 日(金) 10:00～17:00
会　　場 ： 幕張メッセ
入　　場 ： 無料（全来場者登録入場制）
主　　催 ： 一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）

最新情報および詳細は、公式 Web サイトをご参照ください。
